



発行所  
山口県小学校長会  
代表者 村川直樹  
校長会事務局  
山口市大手町2-18  
☎ 083-925-2919  
FAX 083-925-6776  
印刷所  
大村印刷株式会社

## 「心でつながる学校経営」を実現するために



山口県小学校長会 会長 村川直樹

### 一 はじめに

新学習指導要領の完全実施がいよいよ目前に迫ってきた。

各学校では、改訂のポイントでもある「社会に開かれた教育課程」を柱に、「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」などの重要な趣旨を教育課程に位置付けるとともに、授業実践や評価を行い、準備を進めておられるのではないかと拝察する。授業を中核とした教育活動の質的な改善によって、子どもの成長・変容に結びつけるためには、校長の「指示・示し、任せながら、時には支え、整え、時には引つ張るリーダーシップ」と「主体性・同僚性を喚起する雰囲気づくり」つまり「心のつながりを意識した学校経営」が大切であると考えます。

### 二 教室で実現したいことは職員室で

「認め合い支え合う集団」「学び合い高め合う集団」の形成と成熟は、目

標を共有しその達成を目指す組織においては、基本的に非常に重要な要素となる。「チーム」という呼び方が使われ始めてかなりの月日が経つが、このようなチームとしての望ましい機能を実現するには、まず、職員室の同僚性・協働性・主体性を培うことが必要である。一人一人の意見や考えが尊重され、悩みも気軽に表出できる風通しのよい職場をベースにしながら、学年やプロジェクトを中心とした校内研修と授業のリンク、子どもの姿を基にした授業づくり・学級づくりが日常的に話題となる職員室を教職員全員でつくりたいものである。

そして、チームのよさを体感している教員が、授業や学級経営にその理念と仕組みを持ち込むのである。

### 三 しなやかな学級経営、授業づくりを支え、学校を開く

教室で子どもと向き合う教員には、

教科等の見方・考え方に基づいた主体的・対話的な授業づくり、子ども一人の自己実現と学級集団としての成長を叶える学級づくり等の重要な使命が課せられている。

校長は、「多様性を認めること」「子どもの思考を促し心に届けること」「小さな成長、当たり前の姿・努力を認めほめること」を示しながら、学年でのOJT、教育相談・校内コーディネート等専門性を有する応援スタッフなどの体制を整え、その取組を見守り支えることが大切である。

一方で、情報発信にも積極的に取り組みたい。学校の課題は、子どもや教職員が頑張っている姿を踏まえつつ、保護者や地域の協力を得て進められている教育活動の好事例を織り込むなどして、より望ましい方向にしていきたいという姿勢で伝えていく。そして、子どもの姿を中心に学校の取組を様々な形でオープンにしていく。そこに、保護者や地域との協働によって、課題の解決・改善に当たりたいという自分の思いや願いを添えていく。

このような取組の継続が、保護者・地域の参画意識を醸成する土台となる

### 四 地域素材や地域人材を生かした学習を仕組む

「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた視点の一つとして、総合的な学習の時間の充実を掲げたい。総合的な学習の目標(第一)の中に「実社会や実生活の中から問いを見いだし…」

というものがある。総合的な学習の時間では、目標を実現するのにふさわしい探究課題を学校が設定する。例えば、「身近な自然環境」「町づくりや地域活性化」「実社会で働く人々の姿と自己のキャリア」等の課題を設定した場合、それはそのまま地域素材、地域人材の活用・交流に直結する。

学年に応じた課題を設定し、「子どもが地域に出て調査したり、交流したりする取組」「調べたことを分析しまとめ発表する取組」に地域の素材や人材が関与することそのものが、教育課程を社会に開くことになる。

そして、地域の課題を大人たちと協働しながら、地域に生きる小さな担い手の一人として、関わり解決しようとする試みは、「地域と共にある学校づくり」が具現化した一つの姿でもある。このような取組の積み重ねによって学校と保護者・地域は心でつながっていくと考えている。

### 五 おわりに

約二年半前に出版された「二〇五〇年衝撃の未来予想」で、著者の苦米地英人は、時代を生き抜く「付加価値」として、生きる力を育む学問を学ぶこと、深い人間性、やりたいことをやる、社会のニーズに適った機能を提供できる人になる、という四点をあげている。

未来を生き抜く力を育む教育を実現する上で、教育課程に実効性をもたせる意味でも、「心のつながり」は、その基幹をなすものだと考える。校長会自体も心でつながっていききたい。

# 令和元年度の 研究 紹介

## <研究主題・副主題>

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く  
日本人の育成を目指す小学校教育の推進  
～社会の変化に挑み 高い志をもって  
未来を切り拓いていく子どもを共に育てる学校経営の推進～

## <校長会関連研究大会>

- ◆山口県総会並びに春季教育研究大会  
5月10日(金) 山口県健康づくりセンター
- ◆山口県秋季教育研究大会  
10月25日(金) スターピアくだまつ 他
- ◆中国地区鳥取大会  
11月 8日(金) 鳥取県民文化会館
- ◆全連小秋田大会  
10月17日(木) ～ 18日(金) 秋田県立武道館 他

### 岩国・和木支部【研究・研修】

#### 学校の教育力向上を図る研究・研修の推進

本支部では、地域や学校間の連携を基盤とした研究・研修を推進すること  
で、①子どもたちの学びや育ちの質の向上、②良好な同僚性の構築と教職員の資質・意欲の向上が図られると考え、校長の果たすべき役割を検証した。

#### 一 研究の実際

- ・ 小中一貫教育に向けた学校間連携
- ・ 地域資源の活用による教育力向上

#### 二 校長の役割

- ・ 教職員の参画意識を高める取組
  - ・ 業務改善につながる同僚性の構築
  - ・ 基本方針の明確化と体制の構築
  - ・ 地域とのつながりと情報収集
  - ・ 良好な同僚性構築の場の設定
- 連携を基盤として今後も全教職員が主体的に関わる取組や、キャリアアステージに応じた研修の充実に努めたい。

### 柳井支部【健やかな体】

#### 健やかな体を育む教育の創造

「スクール・コミュニティ」の機能を活用し、課題解決を高める校長の役割とリーダーシップ  
生活習慣や食習慣、運動習慣等、子どもを取り巻く健康課題が山積している。私たちは、これらの課題解決に向けて、子どもの実態に即した方策を検討する必要がある。そこで、子どもが一日の大半を過ごす学校においては、自分の健康は自分で保持増進するヘルスプロモーションの考え方を根底に据え、体育科における保健学習や日々の

保健指導を充実させる必要がある。また、学校だけで解決の糸口を探るのではなく、食事や睡眠等、生活習慣の核心となる家庭、生活基盤である地域との関わりも重要な要素の一つとなる。これらのことから、学校・家庭・地域の連携を通して、健康課題の解決を高めるための校長の役割とリーダーシップについて研究を進めることとした。

### 大島支部【知性・創造性】

#### 主体的・対話的で深い学びにつながる組織的なカリキュラム・マネジメントの在り方

- 一 はじめに  
本支部では、知性・創造性を育む組織的なカリキュラム・マネジメントの体制づくりに、校長が連携・協働して果たすべき具体的方策を明らかにすることとした。
- 二 研究の概要
  - (一) 拡大集合学習の活用
  - (二) ユニット型研修の活用
- 三 校長の役割
  - (一) 持続性あるシステムの構築
  - (二) 小規模校間の連携・協働の組織づくりや活動の場の構築
- 四 おわりに  
本研究で、小規模校において、校長の協働による組織・場・環境等の構築が大切であることが明らかになった。

### 周南支部【リーダー育成】

#### 学校運営を担うリーダーの育成と校長の役割

- 本支部では、昨年度市内全教職員に意識調査を実施し、リーダーには「企画力」「調整力」「広い視野」の三つの力が必要であると考えた。この三つの力は様々な人との関わりの中で育成することができると考え、今年度は、連携に視点を置いたミドルリーダーの育成に焦点を当て、四つの観点から研究を進めることとした。
- 一 教職員同士の連携を通じた育成の取組
  - 二 中学校との連携を通じた取組
  - 三 地域との連携を通じた取組
  - 四 関係機関との連携を通じた取組
- 校長として、教員のキャリアアステージを意識しながら、知識や技能を学ぶ場の設定や意欲を高める取組等をさらに工夫して研究を深めていきたい。



下松支部【学校安全】

地域ぐるみで推進する安全教育・防災教育の推進

本支部では、研究主題「地域ぐるみで推進する安全教育・防災教育の推進」の下、地域連携・校種間連携の取組を推進する校長の役割について研究を進めている。昨年七月の西日本豪雨では、本県も含め、西日本を中心に多くの地域で浸水害や土砂災害が発生した。本年度も全国各地で登下校時の交通事故や不審者事案が後を絶たない。

そこで、校長会と市防災部局との連携の下、昨年度の豪雨被害や避難所設営等について情報交換を深めてきた。また、小中合同で実施した引き渡し訓練や赤十字等の関係団体と連携した防災教育に取り組み、その成果や課題を共有しながら、持続性のある取組を推進するために校長が果たすべき役割について究明している。

光支部【危機対応】

子どもを取り巻く様々な危機への対応

一 研究の実際

- (一) 組織的な危機管理体制の構築
  - ① 家庭と連携した危機対応訓練
  - ② 地域と連携・協働した危機対応訓練
- (二) 教職員の危機対応力の向上
  - ① 食物アレルギー等給食全般に係る対応研修
  - ② 児童の危機対応力の向上
- (三) 児童の危機対応力の向上

① K Y T 学習

② プラインド方式での訓練

二 校長の役割について

- (一) 危機管理体制の構築
  - ① 危機管理マニュアルの整備
  - ② 最悪の状況を想定した対応
- (二) 危機管理意識と危機対応力の向上
  - ① 実践的な研修や訓練の企画

山口支部【社会形成能力】

社会形成能力を育む教育の推進

本支部では、昨年度から社会形成能力を育成するための視点として、

- ① コミュニケーション能力の育成
- ② キャリア教育の推進
- ③ 地域連携の充実

の三点をあげて研究に取り組んでいる。この三つは、山口市教育委員会が策定した第二次山口市教育振興基本計画の基本的方向性と、施策の展開における

宇部支部【自立と共生】

自立し、共に生きる力を育む教育の推進

本支部では、三か年の研究計画のもと、年次ごとにサブテーマを定め、その方策と成果を積み上げながら、日々、研究実践に励んでいる。昨年度は、研究一年目として、環境教育を切り口に取り組み、大きな成果を得た。

そこで、本年度は、その研究成果を踏まえ、特別支援教育を切り口に、本研究主題の解明に迫ることとした。

研究の視点は、次のとおりである。

- ① 組織対応
- ② 資質向上
- ③ 理解推進
- ④ 外部連携

この四点から、研究実践に取り組み、その方策と成果を明らかにするとともに、校長としての役割と指導性を究明して参りたい。そして、次年度の S D G s を踏まえた教育の推進につなげ、三年間の研究のまとめとしたい。

美祿支部【経営ビジョン】

先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知

一 研究の実際

- 本支部では、「みね型地域連携教育」を核としながら、先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知に向けて、各校の取組を整理しながら校長の役割や成果と課題をまとめた。
- (一) 研究の実際
    - ・ 現状の把握に向けた取組
    - ・ 策定に向けた取組
    - ・ 周知に向けた取組
  - (二) 校長の役割
    - ・ 学校評価や熟議の活用
    - ・ 関係団体や近隣校などとの連携
    - ・ 主体的取組へ教職員の意識改革
  - (三) 成果と課題
    - ・ 周知のための様々な連携
    - ・ 地域の中での子どもたちの成長
    - ・ 学校を核とした地域づくり
    - ・ 保護者や地域との意識統一

下関支部【評価・改善】

未来の創り手を育成する学校経営の評価・改善と校長の役割

本支部では、コミュニティ・スクールを評価・改善の中心に据えて、以下のような研究の柱を設け、市全体で参画意識を高めながら取り組んでいる。

- (一) 中学校区共通の評価項目による分析や情報の共有
- (二) 学校評価の内容や方法、生かす方に関する研修

三 校長の役割

- (一) 協議や調査からの課題分析
- (二) 活性化する組織への改編
- (三) 評価の改善に向けた情報収集
- (四) 組織づくり及び進捗状況の発信
- (五) 保護者・地域・幼保小中高と連携した体制づくり

地域と連携した安全への取組

周防大島町立久賀小学校長

中山 一弘

行政相談員の皆さんが本校で出前授業をしてくださるようになって、三年目となる。この出前授業で、特筆すべきは、授業の中で児童から上がった要望に対して真剣に取り組んでくださることだ。「この道路に信号機があったらいいのに」「路側帯の白線が消えている」といった意見を地図に落とし込み、現場を確認して、約半年かけて役場や警察、県土木等関係各所に働きかけてくださる。児童の要望が叶ったこともそうでなかったことも三学期には、書面で回答する、といった徹底ぶりである。児童が代わると要望事項も少しずつ違うので、新たな気



取組紹介

した取組

持ちで取り組んでくださっている。

本年度、久賀小・中学校では「地域力を活用した通学路の安全を確保する取組」事業の指定を受けている。行政相談員だけでなく、PTA、学校運営協議会、見守りボランティア等皆さんの力を借りて、今後も安全な地域づくりを進めていきたいと考えている。

楽しい学校

～地域の皆様とつながって～

山口市立八坂小学校長

山本 浩之

「地域の方の顔が見える学校づくり」を目指して取り組んでいるが、現状はなかなか思うようにはならない。本校の立地条件による場所もあるが、地域の方々がふらりと学校を訪れて、児童とふれあうといった状況にはならないのである。では、どうすればよいか。皆で相談した結果、それならこちらから出向いていけばよいということになり、先生方と児童全員で地域の方々に会いに押しかけることにした。昨年十一月、ふれあい遠足で旧引谷小を訪問し、重源太鼓の演奏と引谷小の校歌を披露したのである。地域の方々と昼食をともし、子どもたちとふれあう楽しさを味わって頂いた。そして、今年五月は旧三谷小を訪問。ふれあい活動を行い、三谷小の校歌を披露した。

先日行った地域参観日には、引谷、三谷地域の方々が連れだつて来てくださった。児童のがんばりに拍手を送ってくださることはとてもありがたい。着任当初、高いと言われた敷居が少し

低くなってきたと感じている。学校も地域も元気になる活動に積極的に取り組んでいきたい、合言葉「楽しい学校」地域の皆様とつながって～」で。

地域の子どもは地域で育てる

～挨拶運動の取組から～

防府市立佐波小学校長

長富 良子

佐波地区には「地域の子どもは地域で育てる」という合言葉がある。学校や保護者、地域の長年の努力が認められ、昨年度、文部科学省「学校安全ボランティア活動奨励賞」を受賞した。今年度は、地域協育ネット（笑顔がっつなく「みちぎねっと」）の共通指導事項の「挨拶」に力を入れていく。本校では「挨拶リーダー」を募集し、朝の校門で高学年のみならず、低学年児童の愛らしい声も響くようになった。また、気持ちのよい挨拶ができる児童を地域の方から紹介して頂き、毎学期表彰している。保護者や教職員も登下校の交通安全の見守りと声かけを行っている。

さらに、小中連携として、「グッドモーニング運動」を展開し、佐波中学校の生徒も本校の校門で小学生へ挨拶を行っている。今秋には、児童・生徒、一般から公募した挨拶標語の優秀作品が幟旗になる予定である。近所同士のつながりが希薄になっていく昨今であるが、子どもたちの挨拶の声が高齢者の生き甲斐となっている話も聞く。笑顔と挨拶が地域の活性化につながることを目指していきたい。

学校教育目標を皆で策定する

～目指す方向の共有～

宇部市立常盤小学校長

青山 武司

「ふるさとを愛し、ふるさとかから愛される『ときわっ子』の育成」これは、今年度の本校の学校教育目標である。言葉に特徴はないが、昨年度一年間かけて学校運営協議会で策定した目標である。平成三十年、本校に着任した。地域や保護者が、学校へ協力的であることが嬉しかった。前校長のリーダーシップにより様々な取組もなされていた。私のすべきことは何か。これまでの取組をもう一度価値付け、目指す方向を再認識することだと考えた。

学校運営協議会では、コミュニケーション・スクール制度について再確認をし、目指す方向を共有することが大切であることも理解して頂いた。十分ではないが、毎回の協議会で意見を交わして頂き、教職員の意見も取り入れながら決まったのが、冒頭の学校教育目標である。協議で出たキーワードから、目指す児童の姿も策定した。

学校運営参画の意識は高まったと感じるが、スタートラインに立てたに過ぎない。先輩方から受け継いだ取組を大切にしながら、更に組織力や学校力が高まるように努めたい。





# 各校の

## 今回のテーマ

# 「地域と連携」

### 深化する地域連携教育

山陽小野田市立小野田小学校長

今本 美智子

本校は、今年度コミュニティ・スクール五年目を迎えたが、年を追うごとに、活動の質が深まってきていることを実感している。これは、「学校の課題を地域にひらく」という柱を全教職員が自覚しているからだと思う。

例えば、今年度入学した一年生は、男子が女子の二倍の人数がいる上、個別に支援が必要な児童が多かった。そこで、四月・五月の授業時間に地域や保護者の方々にボランティアとして入って頂くようにした。すると、授業の延長で給食の様子も観られたボランティアの方々が「給食時間にも支援が必要」と言って、シフトを組んで支援に入ってくれた。他にも、コンパスを使う学習・習字（三年）や裁縫・調理（高学年）、校外学習（低・中学生）等、枚挙にいとまがない。

学校の要望を月・週毎にコーディネートに連絡し、コーディネートが即座に「適材適所」を合言葉に人材を集めるというシステムがしっかり機能している。学校課題を地域と共有することで、より充実した学校運営を行うことができるため、地域や保護者の方々に感謝の毎日である。

人への思いを大切に

美祿市立秋芳桂花小学校長

佐々木 真治

美祿市の豊かな自然に包まれた地域にある本校では、梨栽培とマーチング活動を柱として地域と連携した取組を展開してきている。さらに、食育、栽培、防犯に関するものなど今年度始めたものもいくつかある。

これらの学習に共通することは、「人への思い」である。

子どもたちの思いは「おいしい梨を栽培される方々の苦労がよく分かった」

「自分たちの演奏を地域のみなさんに喜んで頂けてうれしい」「地域のみなさんも犯罪の被害に遭わないでほしい」などである。一方、地域の方々は「地元の自然のよさや名産物を知り、大切にしたい」「子どもたちの演奏を聴いていると元気が出てくる」「高齢者をねらった犯罪防止の取組に協力してほしい」など、子どもたちと地域の方々の思いが相互に



校長の私は、これらの取組が円滑に進むよう人のネットワークづくりに努めている。子どもたちのために、地域のみなさんのために、という人への思いを大切にして、学校と地域が一体となって子どもたちを育てていきたい。

地域とともに取り組む食農教育

下関市立王喜小学校長

増元 進

本校では、地域の方々、そしてJAの方々と連携して、食農教育に取り組んでいる。

四月中旬には、三、四年生が、王喜の名産であるアスパラガスとたけのこの収穫を体験させて頂く。

六月中旬には、一、二年生が芋の苗植え、五年生が稲の苗植えを行う。もちろん、体験はこれだけで終わりではない。毎日の水やりや草抜き等の世話もする。こうして育てた芋と米は、十月中旬に収穫する。

五年生が収穫した米は、JAの婦人部の方々と一緒ににぎり餅と豚汁作りを使い、婦人部の方々と会食を楽しんでいる。また、稲刈りが出たわらも活用して、地域の方に教わりながら、しめ縄を作る活動も行っている。

地域と連携したこれらの体験を通して、食に関する知識を習得することはもちろんであるが、農業に携わる方々の苦労や思いを知り、生き物を頂いているということの理解を深め、感謝の心を育むことができる。また、地域の方とのふれあいが生まれると同時に、

地域のことを知り、ふるさとを愛する心を育むこともできる。

「小規模校のよさ」を生かす地域連携

萩市立川上小学校長

保賀 信裕

本校は、過疎化が進む山間部の全校二十二名の小規模校である。

小規模校のよさを生かした地域連携の主な取組を四つ紹介させて頂く。

○ 教育基本構想の小中一本化  
学校運営協議会で熟議を行い、保小中十五年間のよりよい学びと育ちを目指して策定した。

○ 保小中地域合同大運動会  
昨年度、小中地域合同開催にし、観客が増え、賑やかで達成感のある運動会になった。本年度から保育園も一緒に、文字どおり地域一体の絆づくりの場になる。

○ 体育科「カヌー」  
特色ある教育の一つとして、本年度から体育科の学習内容にカヌーを取り入れた。総合事務所が所有するカヌーを利用し、カヌー協会所属の地域住民にも指導に加わって頂いている。

○ 校内持久走大会と地域走ろう大会の統合  
本年度から、企画・運営は地域、教職員は当日役員となる。統合のねらいは、地域貢献・学校支援・業務改善の三つである。

今後「学校づくり」⇄「地域づくり」の視点で、互いにメリットのある連携を進めていきたい。

支 部 情 報

山陽小野田支部

〜策定した先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの実行と周知〜

山陽小野田市校長会は、小学校十二校、中学校六校（一校のみ校長が小中兼務）、市内の知的障害特別支援学級の十七名で構成され、中学校区単位の異校種連携、小中一貫教育、地域連携教育が進めやすい支部と言える。

市内校長会は、原則として、月一回程度の定例会を開催している。定例会は、原則として小中学校の校長が一堂に会することとなっており、市教委からの指示伝達に続いて、学校運営や生徒指導上の情報交換、学力向上や人材育成にかかわる合同研修会を行い、小中連携・小中一貫教育を推進している。その後に行う小学校だけの研修会では、昨年度校長会県大会「経営ビジョン分科会」で提案し、策定した学校経営ビジョンに係る校長の役割とリーダーシップについて継続して研修を行っている。

山陽小野田市の小中学校は、市の重点取組事項である「生活改善・学力向上」「地域力・学校力・家庭力向上」「山口東京理科大学との連携強化」の三つを柱とした学校運営を進めている。中でも、「地域力・学校力・家庭力

向上」プロジェクトは、山陽小野田市独自の取組であり、コミュニティ・スクール導入以前から、学校支援ボランティアの活動を中心として、市内全小・中学校で進めている。特徴的なのは、各小学校区にある公民館の館長を第二地域コーディネーターと位置付け、学校と公民館が協働して地域とともにある学校づくりを進める点にある。また、「地域教育協議会」の設置により、全教職員が参加して地域連携を進める仕組みとなっている。

この仕組みを利用して特色ある学校教育を進めるのは、校長の役割である。各校では、昨年度策定した自校の特色を生かした経営ビジョンを保護者や地域の方々、教職員と共有して取組を進めている。

一方で、学校運営協議会委員の学校運営への参画意識の向上を図ることが市全体の課題でもある。

市の定例校長会においては、学校経営上の課題や悩みを共有したり、互いの学校の実践を紹介し合ったりすることで、自らの学校経営を見直すよい機会となっている。



（植生小学校長 真鍋伸明）

寒さの中の熱い心



周南市立沼城小学校長 大池 浩三

「沼城の冬は寒いよ」

赴任先が沼城小学校だと決まった後、たくさんの方に同じように言われた。実際に赴任してみると、確かに周南市の中心地に比べると平均三度から四度気温が低い。まだ経験していない冬にはかなりの雪が降り積もり、周南市街地へ下る道はかなりの危険を伴うらしい。

そんな周南市の山間部に位置する沼城小学校であるが、自分を最初に迎えてくれたのは、子どもたちの「熱い挨拶の声」であった。朝、正門に立って子どもたちを迎えていると、自分の姿を認めた子どもたちから大きく明るい「おはようございます」の声が飛んできた。何と熱い子どもたちか。

また、地区の会合では、子どもたちに負けない熱い大人たちに圧倒された。自分たちの町を元気にするために、みんなが真剣に考え、多くの思いや考えが飛び交う。何と熱い人たちか。気候は寒いが心は熱い。そんな沼城小学校。校長としても、心の熱さでは負けられない。沼城小学校を保護者を、地域を、そして、何より子どもたちを愛し、熱い心で頑張ると決めた。今年のキャッチフレーズは：「沼城維新で、沼城越え」である。

新校長の声

強い思いをもって行う 小さな一歩



下関市立豊田下小学校長 中原 美穂

朝、学校のあちらこちらから元気な挨拶と歌声が聞こえてくる。児童の声に元気をもらい、「今日も一日頑張ろう」と気合いが入る。程なくすると、養護教諭から「校長先生、今日も欠席なしです」という報告がある。本校児童は五十三名。ほぼ毎日全員が元気に登校していることは、自慢の一つでもある。

下関で一番高い山「華山」の麓にある豊田下小学校は、豊かな自然に囲まれ長い歴史をもつ学校であり、地域や保護者の方々も大変協力的である。豊田下地区が「アンモナイトの化石」が出土することと世界的に有名なことから、今年度から「化石クラブ」が新設された。本当に素晴らしい学校に着任したと実感している。

この小学校を、「みんなが笑顔で過ごせる温かい学校」にしたいと強く思う。今、私は、自分自身がまず地域の「ひと・もの・こと」を知ろうと心掛けていく。校長室のドアは、常に開けている。児童や職員はもちろんのこと、どなたが来室されても、「笑顔」で迎えたいと思う。そうすることが、学校への敷居を低くし、誰もが笑顔で過ごせる温かい学校になるための小さな一歩だと信じている。





本校校区の約半分を占めている「ハス田」。江戸時代の吉川広家岩国移住以来、干拓によって広がった土地である。

学校の前の国道一八八号線から海側の土地が全て、時代ごとの干拓によってできたということを、子どもたちは学ぶまでは知らない。しかし、広大なハス田は、本校の子どもたちにとって多くの体験ができる場であり、四季折々に訪ねる学びの場となっている。

一学期の終業式のあと、三年生の子どもたちがハス田の見学に行った。学校から約二十分歩いた場所に、れんこん農家の方とJA山口県岩国に準備してもらっている「れんこん栽培体験実習田」がある。ハス田のれんこんは子どもたちの背丈より高くなっており、白い花があちこちで咲いていた。

毎年の四月下旬、本校の三年生はれんこんの植え付けを体験する。県内の多くの学校で、その地域の特産物の生産に関わる体験を行っているが、本校の場合は「れんこん」となる。

山口県は、全国五番目のれんこんの生産地である。また、県内でも岩国市が一番であり、さらに市内でも校区内の尾津地区が最も多く生産している。よって地元の人々は、自信と誇りをもって「尾津れんこん」と呼んでいる。

今年も三年生が、準備してもらった種れんこんの植え付けを行った。

少し雨交じりの天気の中、子どもたちは膝下まである水の中に入り、足の裏に泥のぬめりを感じながら植え付けていった。そして七月。十月の収穫に向け、夏の生長を確かめたのである。

七月上旬の新聞に、三年生の授業において、毎年ゲストティーチャーをお願いしている農家の方の文章が掲載されていた。その中に、自分の後継者に向けて「もつと魅力ある仕事と思われよう技術面・品質面・所得面を向上させたい」とあった。

「どうすれば担い手不足を解消できるか」という問いは、「なぜ岩国でれんこんなのか」「なぜ、白い花ばかりなのか」「全国一位の茨城県と何が違うのか」等の子どもたちの問いともつながる。

テレビコマースィナルで知り、衝撃を受けた企業理念としての「問う・創造する」という見方・考え方は、教育の理念にもつながると考える。

問い続ける中で古里をよりよく知り、古里への愛情と誇りを一人一人の心の中に育てる学びを創造したい。

「ハス田」発 「問う・創造する」  
岩国市立愛宕小学校長 世良 泰 章

飛 耳 長 日

今一度、学級づくりを見直す  
防府市立勝間小学校長 梶 田 崇 晴



子どもたちの生きる力を目指して改訂された新学習指導要領が来年度から完全実施に入る。そんな中、いまだにいじめの問題など人間関係が起因とされる出来事が後を絶たない。悲惨なニュースが報道されるたびに、「未然にできることはなかったのか」「その子どもたちに居場所を作ってあげることができなかったのか」という思いに駆られる。

昨今、学力向上を第一に考え、学級づくりが軽視されている現状をよく聞く。教育学者の安彦忠彦氏は「よい学級があったてよい授業ができる」と言われている。新学習指導要領にも「日常の学級経営の充実」が明記された。研究授業の後に行われる協議会でも、必ず学級づくりの大切さが語られる。にもかかわらず、いじめ問題を始めとする人間関係に係る出来事が後を絶たないのはなぜか。今一度、よりよい人間関係づくりについて考えてみたい。

① 学級づくりを楽しむ  
子どもたちは楽しいことが大好きだ。

そこで、私は子どもたちと一緒に学級づくりを楽しむ教師を目指すよう薦めている。楽しい経験を通して、子ども同士とのよりよい関わり方を学ばせることを大事にしたい。

② 多様な物差しで見ると子どもにはいろいろな面がある。それらを多面的に見るよう心掛けたい。そして子ども一人一人のよさにスポットライトを当て、そのよさが広がるような手立てを打つとよい。

③ 学級を耕し仕掛ける  
「自分たちの学級は自分たちで創る」と言える学級風土ができるように学級を耕すことを心掛ける。あわせて、子どもたちの自治的活動が動き出すように仕掛けることも大事である。

④ つながりのある関係をつくる  
子どもと子ども、子どもと先生がつながることを大事にしたい。子ども同士をつなぐことで、学級に協働して何かをしようという雰囲気生まれる。

⑤ 子どもを信じて任せる  
子どもは、先生に信じられていると自覚したとき、素晴らしい力を発揮する。自治的活動の範囲を明らかにし、子どもに任せる活動を増やしたい。

よりよい人間関係がつかれず悲しい思いをする子どもが一人でも少なくないように、今一度、学級づくりの大切さを認識できる学校づくりに取り組みでいきたい。

下松市は、小学校での理科ボランティアの活動がとても活発です。活動母体は、日立製作所笠戸事業所のOBで組織された「日立のぞみ会」。その事務局をしておられる氷室久雄さん（下松市在住）に、活動への思いやその内容、活動を通して子どもたちに伝えたいことを伺いました。

**\*どうして理科ボランティアを始めたのですか。**

平成二十三年から、十九名の会員とともに、下松小と久保小で、理科の授業のサポートを始めました。平成三十年には、会員数が五十名となり、花岡小、公集小、中村小でも行うようになりました。先生や子どもたちが喜んでくれるのが何より嬉しいことです。いずれ、市内全ての小学校でできればよいと考えています。そのために、会員を増やす働きかけをしています。下松市は、「ものづくり」の街です。子どもの理科離れが進んでいるといわれる中、子どもたちが、「ものづくり」の原点である理科を好きになって欲しいという思いから、理科ボランティアを始めました。

**\*理科ボランティアは、具体的にどんなことをされているのですか。**

① 理科の授業（四・五・六年対象）支援

学習支援や実験や観察の準備と後片付け、器具の点検・整備をしています。  
② ものづくり工作教室（全学年対象）

下学年は、磁石を使った「かたかたキツッキ」や「飛びつくワニさん」、上学年は、乾電池と銅線で「単極モーター」を作ります。

③ 親子ものづくり工作教室  
親子で、「単極モーター」などを作ります。「つくる」楽しさが実感できるようにしています。

④ 親子プログラミング教室

### この人 この歩み 「ものづくり」の原点 理科が大好きな子に

日立のぞみ会

氷室久雄さん



探訪シリーズ

平成三十年から年二回行っています。プログラムをつくり、実際にフォークリフト型ロボットの動かします。保護者の関心が高く、毎回たくさん参加者があります。

他に、日立の工場見学のご案内や科学の

お話を、楽しい理科授業づくりセミナー（教員対象）にも参加しています。  
**\*理科ボランティアをされて、よかったですか。**  
たなと思われのはどんなときですか。

出会ったときに、子どもたちが大きな声で挨拶をしてくれたり、話しかけてくれたりします。

授業中、子どもが戸惑っているときに、アドバイスをする、その子の表情がぱっと明るくなります。そういうときは、理科ボランティアであることのやり甲斐を感じます。

また、理科の授業づくりに向けた、先生方との協働作業は楽しく、私たちのノウハウを蓄積するよい機会になっています。

**\*子どもたちにメッセージをお願いします。**

いろいろなことに興味をもって欲しいと思います。そして、実際に自分の手でつくり、汗をかいて、失敗して、つくり直して、試行錯誤する体験をたくさん積んで欲しいと思います。

来年度から必修となるプログラミング教育は、「手順を考えて」「やってみて」「不具合を修正する」ということです。これは、「ものづくり」と同じです。いろいろなことに興味をもち、様々な体験をすることが大切だと思います。

先生は言います「理科ボランティアなしの授業は考えられない」。

子どもは言います「理科ボランティアの方々のおかげで、理科の実験や勉強が好きになりました」。

そして、理科ボランティアの方は言われます「理科ボランティア活動に参加できていることに感謝する毎日です」。

まさにウインウインの関係です。  
（下松市立豊井小学校長 武居利彦）

## 本部だより

新会員四十九名を迎え、総会員数が二百八十五名となり、令和の時代となつて初の小学校長会総会が、五月十日に開催された。昨年度の諸事項が報告・承認された後に役員改選が行われ、村川新会長のもと、新たな役員を加えた今年度の運営組織及び活動方針、事業計画、予算、各専門部からの提案が承認され、本年年度の校長会がスタートした。

「社会に開かれた教育課程」、「カリキュラム・マネジメント」、「主体的・対話的で深い学び」の実現など、次年度から小学校で全面实施となる新学習指導要領が目指す教育の着実な実施に向け、各学校において様々な研究や取組が進められている。こうした中、子どもたちに「生きる力」を身に付けさせるため、校長は明確なビジョンを掲げ、学校組織の活性化を図り、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に一層努めていかなければならない。

さらに、地域連携教育の推進、学力向上、人材育成、教職員の働き方改革と、学校や地域の実情により、様々な課題が山積している。本校長会には、各学校の取組や各支部による研究を中心に、情報の共有及び連携を図りながら、課題解決に向けた工夫改善を重ね、学校経営の充実につなげていくことが求められている。